



Title	カザフ語における自動詞を形成する形式
Author(s)	藤家, 洋昭
Citation	外国語教育のフロンティア. 2020, 3, p. 87-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カザフ語における自動詞を形成する形式

Forms of Intransitive Verbs in Kazakh

藤家 洋昭

要約

カザフ語はチュルク系の言語である。他のチュルク系の言語の多くがそうであるのと同じように、カザフ語は膠着語的性質が強く、形式と意味がかなりの程度対応する。動詞に関しても、語幹とそれ以外の部分、例えばボイス等を表す形式を分離して抽出することが容易である。ところが、日本語においては「こわす」「こわれる」「こわされる」のように、他動詞－自動詞－受身の形式面での対立がある場合があるのに対し、カザフ語においてはこれらに相当する動詞では “бұз- /buz-/” “бұзыл- /buzıl-/” のように、二つの対立、すなわち他動詞ともう一つの対立だけがある。それでは他動詞ではない方の動詞 (бұзыл- /buzıl-/) が日本語の「こわれる」に相当するいわゆる自動詞なのか、それとも「こわされる」に相当する受身なのかということが問題になるが、この問題についてはこれまで全くと言っていいほど明らかにされてこなかった。本研究ではその点に着目し、カザフ語におけるいわゆる自動詞を形成する形式とそれらから形成される動詞を、副詞的修飾語との共起等をもとに、語彙概念構造 (LCS: Lexical Conceptual Structure) を組み込んだ主辞駆動句構造文法 (HPSG: Head-driven Phrase Structure Grammar) の枠組みで記述した。

本研究の結果、カザフ語におけるいわゆる自動詞を形成する形式から形成される動詞は、語彙概念構造レベルで多義性を持つということが明らかになった。

キーワード：カザフ語、自動詞、受身、多義性

1. はじめに

本研究では、カザフ語における自動詞を形成する形式を記述する。

カザフ語は膠着語的性質が強く、他動詞から自動詞を形成すると考えられる形式が接辞として認められる。また、それらは受身を形成するとも考えられる。これまで、それらが自動詞を形成するのかそれとも受身を形成するのかという問題について必ずしも明らかにされてこなかった。そこで本研究では、それらの形式が付いた動詞について、自動詞なのか受身なのかを考察し、記述する。

本研究の結果、カザフ語における自動詞を形成する形式が付いた動詞の、自動詞と受身の多義性が語彙概念構造レベルで明らかにされた。

カザフ語は系統的にチュルク系の言語である。本研究は、同じチュルク系の言語であるウイグル語の動詞の自動詞と受身を表す形式についての先行研究^[6]をもとにしている。本研究はウイグル語とカザフ語の対照研究ではないが、同じチュルク系の言語における自動詞形成のメカニズムの違いを明らかにすることも考えつつ、可能な限り先行研究^[6]とパラレルな議論を目指すようつとめた。なお、本研究におけるカザフ語のデータの多くは、カザフスタンにおいてカザフ語母語話者から直接採集したものである。特に、容認性に関するデータのすべてはカザフスタンにおいてカザフ語母語話者から採集したものである。

本論文におけるカザフ語表記は、はじめにキリル文字正書法にもとづく表記法でカザフ語を記し、その後にチュルク語研究での慣用的な表記法を用いて音素表記に近い形で記す。厳密には音素表記ではないが、スラッシュ “/” で囲んで示すことにする。なお、センテンスにおける各語についてはスラッシュで囲むことをしていない。

2. 基本データと考察

前章でも述べたが、カザフ語は膠着語的性質が強い。このため、形式と意味の対応がかなりはっきりしている。形式と意味の対応がかなりはっきりしていることは、動詞についても同じで、どの部分が語幹でどの部分が人称を表しているか等、それらの形式を容易に抽出することができる。動詞の自他に関してはどうかと言うと、自他の対応があるものについては、基本的に形で区別することができる。ただし、日本語では例えば、「こわす」(他動詞)、「こわれる」(自動詞)、「こわされる」(受身)のように、いわゆる自動詞と受身の、形の上での違いがはっきりしているのに対し、カザフ語ではそれら自動詞と受身の、形の上での違いが明らかでない。例えば、бұз- /buz-/ という動詞は「こわす」という意味の他動詞であるが、これに対応するものは、-ыл /-ıl/ という形式を付けた бұзыл- /buzıl-/ である。これが「こわれる」なのか「こわされる」なのか明らかではない。ここまですとまとめると次のようになる。

日本語

他動詞	自動詞	受身
こわす	こわれる	こわされる

カザフ語

他動詞	自動詞? 受身?
бұз-/buz-/	бұзыл-/buzıl-/

カザフ語伝統文法^{[1][2]}ではこれらを他動詞から自動詞の派生と記述すると同時に、-ыл

/-il/等はボイスを形成する形式としても分析されてきた。しかしながら自動詞と受身の関係についてはまったくといっていいほど記述がない。

ここで、カザフ語伝統文法でのボイスについての記述をまとめると次のようになる (カザフ語には合計5つのボイス (etic /etis/) があるとされているが、ここでの議論に直接関係するのは受身 (ырықсыз etic /irıqsız etis/) である)。受身形は次のように形成される。

動詞語幹 + ыл /il/ ~ іл /il/ ~ л /l/ ~ ын /ın/ ~ ін /in/ ~ н /n/

これら形式の違いが何によるかは、基本的に、出現する音環境によるもので、意味の違いはないと考えられる。

受身文について見ておくと、カザフ語では受身文は他の動詞文と語順の違いはなく、対応する能動文の動作主は、жағынан /jaɣɪnan/「～によって」を用いて表すことができる。

(1) Аудитория кезекші жағынан тазаланды.

awdiytoriya kezekši jaɣɪnan tazalandı

教室・当番・jaɣɪnan (によって)・そうじされた「教室は当番によってそうじされた。」

対応する自動詞が想定できないような他動詞の場合は、-ыл /-il/ 等が付くことによって形成される動詞は、受身形の動詞であると考えられる。対応する自動詞が想定できない他動詞とは、たとえば、いわゆる働きかけ他動詞 (活動動詞) がその例としてあげられ、日本語においても働きかけ他動詞には自他のペアがない。

例:

他動詞	受身	自動詞
たたく	たたかれる	?
ける	けられる	?

問題なのは、対応する自動詞が想定できる場合、つまり受身と自動詞の両方の存在が想定できる場合である。

カザフ語においてはいわゆる自動詞文と受身文の間に構文的な差がないため、自動詞と受身の、語形、構文等、表面的な形の違いによる区別は困難である。

3. さらなるデータと分析

3.1 さらなるデータ

本節では、カザフ語における受身と自動詞の区別の有無について、さらなるデータを加えて前章とは別の観点から検証する。

自動詞と受身が異なった形で表わされるかどうかについて、自動詞化/受身化だけを見ても解決できそうにない。そこで、自動詞と受身が別の形で表わされ得るかを別のパターンの場合にどのようなになっているかを見てみる。例えば、元が自動詞である動詞を考えてみよう。өш- /ös-/「消える」を例にとる。まず、өш- /ös-/が自動詞であって受身 (消

される) ではないことを確認しておく。

(2) От өшті.

ot öšti

火・消えた「火が消えた。」

(3) *От өрт сөндіруші жағынан өшті.

*ot ört söndiriwşi jaǵınan öšti

火・消防士・によって・öšti

өш-/öš-/ には、対応する他動詞である өшір-/öšir-/「消す」がある。

(4) Өрт сөндіруші от өшірді.

ört söndiriwşi ot öširdi.

消防士・火・消した「消防士は火を消した。」

そして、өшір-/öšir-/は受身にすることができ、өшіріл-/öširil-/「消される」という形がある。

(5) От өрт сөндіруші жағынан өшірілді.

ot ört söndiriwşi jaǵınan öširildi

火・消防士・によって・消された「火は消防士によって消された。」

өшірілді /öširildi/ の代わりに өшті /öšti/ を用いると非文になる。

(6) *От өрт сөндіруші жағынан өшті.

*ot ört söndiriwşi jaǵınan öšti.

火・消防士・によって・消えた

つまり、自動詞と受身形には区別がある。したがって、カザフ語においては、少なくとも元が自動詞である動詞の派生については、受身と自動詞の区別があるということができ、カザフ語において受身と自動詞は別のカテゴリーに入ると考えられる。

3.2 分析

3.2.1 語彙概念構造

本研究では、語彙主義の立場に立ち、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure: 以下 LCS と呼ぶ) を組み込んだ主辞駆動句構造文法によって分析する。LCS には、研究者よる、あるいは、同じ研究者によるものでもバージョンによる違いがあるが、本研究では先行研究^[5]にもとづき、次の基本述語を分析の前提にしている。

CAUSE: 外的な誘因が対象物の変化を引き起こすことを表す。

ACT: 継続的あるいは一時的な「活動」を表す。主語の意思によって活動のはじめと終わりを決めることができる。

ON: ACT と一緒に用いられると働きかけの対象を示す。

BECOME: 「変化」を表す。

BE: 静止した「状態」を表す。

AT: BEと一緒に用いられて、抽象的状态、物理的位置を示す。

これら基本的述語の組み合わせにより、具体的な語は次のようになる。

活動自動詞: [1]ACT]

働きかけ他動詞: [1]ACT ON-[2]

変化自動詞: [BECOME [2]BE AT-[3]

使役他動詞: [[1]ACT (ON-[2])] CAUSE [BECOME [2]BE AT-[3]]]

なお、本研究では、先行研究_[4]にならい、LCSにおける項はあくまでも意味論的な値であり、統語的な項とは別のものであると考えている。統語論的な項は、主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar: HPSG)_[3] の枠組みにおける語彙項目の中の ARG-ST の項として記述される。したがって、LCS の項は、統語構造には直接写像されない。これらのことにより、先行研究_[4]にもとづくと、例えばいわゆる使役他動詞は次のような語彙情報を持つことを分析の前提としている。

$$\left[\begin{array}{l} \text{ARG-ST [EXT <1:3>, INT <2:4>]} \\ \text{LCS [[3]ACT ON-[5] CAUSE [BECOME [4]BE AT-[6]]]} \end{array} \right]$$

また、受身は対応する能動文と基本的な意味は同じであるとの立場に立ち、受身を表す動詞の語彙情報を次のように仮定している。

$$\left[\begin{array}{l} \text{ARG-ST [INT <2:4>]} \\ \text{LCS [[3]ACT ON-[5] CAUSE [BECOME [4]BE AT-[6]]]} \end{array} \right]$$

3.2.2 副詞的修飾語句との共起

動詞の意味を考察するために、副詞的修飾語との共起関係をみる。具体的には、өздігінен /özdiginen/ 「ひとりでに、自然と」と әдейі /ädeyi/ 「わざと」との共起関係をみる。これらは、意味的に ACT との相性に違いがある。すなわち、自分の意思でコントロールできるのが ACT なので、әдейі /ädeyi/ とは共起できるが、逆に өздігінен /özdiginen/ とは共起できない。単純な例で確認しておく。

(7) Нұрбек әдейі жүгірді.

nurbek ädeyi жүгirdi.

ヌルベク (人名) ・わざと ・走った 「ヌルベクはわざと走った。」

(8) *Нұрбек өздігінен жүгірді.

* nurbek özdiginen жүгirdi.

ヌルベク・ひとりでに・走った

意思性をもたない動詞はこれとは反対の性質を示す。

(9) Қар өздігінен еріді.

qar özdiginen eridi.

雪・ひとりでに・とけた「雪がひとりでにとけた。」

(10) *Қар әдейі еріді.

*qar әдейі eridi.

雪・わざと・とけた

意思性については、次のテストでも確認できる。

(11) Нұрбектің істегені жүгіру болды.

nurbektiñ istegeni жүгіріw boldı.

ヌルベク・したこと・走ること・だった「ヌルベクがしたことは走ることだった」

(12) *Қардың істегені еру болды.

*qardıñ istegeni eriw boldı.

雪の・したこと・とけること・だった

このように、-нің істегені /-niñ istegeni/「～がしたことは」と共起できれば意思性があると判断できる。以上のことから、жүгір- /jügir-/、epi- /eri-/は、それぞれ次のような LCS を持つと考えられる。

жүгір- /jügir-/ : [1]ACT]

epi- /eri-/ : [BECOME [2]BE AT-3]] ただし、3は定項で、3= 溶けた状態

以上のテストをもとに、問題になっている自動詞か受身かについて、動詞 бұз- /buz-/ とその派生動詞 бұзыл- /buzıl-/ をとりあげて考察する。

他動詞文：

(13) Бала телевизорды әдейі бұзды.

bala televiýzordı ädeýi buzdı.

子供・テレビを・わざと・こわした「子供がテレビをわざとこわした。」

(14) *Бала телевизорды өздігінен бұзды.

*bala televiýzordı özdiginen buzdı.

子供・コンピュータを・ひとりでに・こわした

受身文：

(15) Телевизор бала жағынан әдейі бұзылды.

televiýzor bala jaýınan ädeýi buzıldı.

テレビ・子供・によって・わざと・こわされた「テレビが子供によってわざとこわされた。」

(16) *Телевизор бала жағынан өздігінен бұзылды.

*televiyzor bala jaǵınan özdiginen buzıldı.

テレビ・子供・によって・ひとりでに・こわされた

子供が意思をもってテレビをわざとこわすということは可能であるが、子供がひとりでにテレビをこわすというのは、特殊な状況を想定しない限りありえない。これらは、対応する受身文においても同じであり、同様の文法性を示す。これらの例では、бала жағынан /bala jaǵınan/ 「子供によって」という語句があるため、受身文であることがわかる。それでは、「～によって」という語句がない、「テレビがわざとこわされた」という文がどうなるか見てみよう。

(17) Телевизор әдейі бұзылды.

televiyzor ädeyi buzıldı.

テレビ・わざと・こわされた「テレビがわざとこわされた。」

テレビがわざとこわれるということは考えられないため、この文は確かに「こわれた」ではなく「こわされた」、すなわち受身を表す。では、өздігінен /özdiginen/ との共起はどうかというと、

(18) Телевизор өздігінен бұзылды.

televiyzor özdiginen buzıldı.

テレビ・ひとりでに・こわれた「テレビがひとりでにこわれた」

これも非文ではなく正文になる。意味を考えると、「ひとりでにこわされる」という状況は考えにくいので、「ひとりでにこわれる」である。つまり、この場合の бұзыл- /buzıl-/ は受身ではなく自動詞であると考えられる。したがって、бұзыл- /buzıl-/ は受身と自動詞の多義性を持つ動詞であると分析することができる。以上のことから、бұз- /buz-/、бұзыл- /buzıl-/ は次のような LCS を持つと分析できる。

бұз- /buz-/:

[①ACT ON-②] CAUSE [BECOME [②BE AT-③]]

ただし、③は定項で、③= こわれた状態

бұзыл- /buzıl-/ 「こわされる」:

[①ACT ON-②] CAUSE [BECOME [②BE AT-③]]

ただし、③は定項で、③= こわれた状態

бұз- /buz-/ と LCS は同じであるが、ARG-ST が異なるため、(いわゆる表層の) 文は違う形になる。

бұзыл- /buzıl-/ 「こわれる」:

[BECOME [②BE AT-③]]

ただし、③は定項で、③= こわれた状態

4. 結論

以上のことから、カザフ語における自動詞を形成すると考えられる形式(によって派生された動詞)は、少なくとも бұзыл- /buzil-/ のような動詞については、語彙項目情報において ARG-ST と LCS が異なる、多義性を持つものであることが明らかになった。また、これは、先行研究^[6]で示されたウイグル語の自動詞形成接辞と基本的には同じで、大きな違いはないと言える。

5. 今後の課題

本研究で明らかにすることのできなかった問題のひとつに派生の方向がある。本論で述べたように、カザフ語の -ил/-il/ などの形式からなる動詞は多義性をもつ。それでは、その多義性はどちらがもとになっているのであろうか。具体的には、自動詞から受身が派生されるのか、あるいは受身から自動詞が派生されるのか、それとも両者の間に派生関係はないのか、という問題である。今後はこのような問題などを明らかにする必要がある。

参考文献

- [1] Geng Shimin, Li Zengxiang
1985 *Hasakeyu jianzhi*. Minzu chubanshe.
- [2] Кабден ed.
2010 *Қазіргі Қазақ Тілі*. Шинжяң Халық Баспасы.
- [3] Sag I. A. & Wasow T.
1999 *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.
- [4] 今泉志奈子・郡司隆男
2002 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理論: レキシコンと統語』東京大学出版会.
- [5] 影山太郎
1999 『形態論と意味』くろしお出版.
- [6] 藤家洋昭
2019 「ウイグル語における自動詞を形成する形式」『言語処理学会第25回年次大会発表論文集』言語処理学会.

謝辞

本研究に協力してくれたカザフ語母語話者に厚く御礼申し上げ感謝する次第である。